



1940年の第26回全国中等学校優勝野球大会大阪大会。藤井寺球場は大観衆で埋まった

# 観衆わく藤井寺球場

## ファイナダー 大阪大会 あの時

### 第26回大会(1940年)

写真が撮影されたのは、40年の第26回大阪大会。観客席後方に立ち見客、一塁側には身を乗り出して観戦する人の姿も。7月22日の

2試合目は、第1回大会からの参加校同士、市岡中(現市岡)と八尾中(現八尾)が対戦。浪華商(現大

体大浪商)や同年の選抜に出場した日新商(現日新)が登場するなど、好カードに恵まれた。

球場を作ったのは、南大阪線を敷いた近鉄の前身会社の一つ「大阪鉄道」。内野席と芝生の外野席を合わせた収容人員は7万人とされ、「東洋一の夢スタジアム」として、28(昭和3)年に完成した。

大阪大会で使われるようになったのは、31年の第17

回大会から。50年までは初戦から決勝まで、ほぼ藤井寺球場のみが会場で、他の球場と併用されるようになって以降も、64年まで決勝などを行うメイン会場とされた。

その後、利便性などから日生球場(大阪市)がメイン会場としてほぼ定着したが、同球場が閉鎖された翌98年、24年ぶりに決勝会場として復活。この年、上宮を決勝で破り、甲子園に出場したPL学園の監督だった河野有造(69)は「ファウルグラウンドが広いのが特徴。高校の青春時代を過ごした藤井寺球場で久しぶりに試合をやれるとうれしく思った」と懐かしむ。

藤井寺球場は大阪大会では、2004年の第86回大会の決勝を最後に翌05年1月に閉鎖。跡地には、野球帽をかぶった少年がほおづえをつく銅像が残り、当時のファンらが訪れる場となっている。

敬称略



藤井寺球場の跡地に立つ銅像「白球の夢」。いづれも藤井寺市

(坂東慎一郎)